

問一 次の問いに答えなさい。

- (ア) 次の1～4の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。
- 1 職場の人と親睦を深める。
 - 2 緩衝地帯を通過する。
 - 3 美術館に彫塑を搬入する。
 - 4 新事業への進出を企てる。
- (イ) 次のa～dの各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 地域のシンコウに努める。
- 1 コウキの目にさらされる。
 - 2 古代国家のコウボウを描く。
 - 3 キョコウの中の真実を見つけ出す。
 - 4 キウコウした土地を活用する。
- b ボクソウを刈る。
- 1 演説のソウコウを用意する。
 - 2 カイソウごとに空調を管理する。
 - 3 バンソウに合わせて歌う。
 - 4 厳しい生存キョウソウを勝ち抜く。
- c チヨウジリを合わせる。
- 1 新しいチヨウシヤが完成した。
 - 2 改善のチヨウコウが見られる。
 - 3 チヨウボの管理を行う。
 - 4 イチヨウの調子を整える薬を飲む。
- d 玉ねぎを細かくキザむ。
- 1 キノクを守ることは大切だ。
 - 2 コクフンを加工して菓子をつくる。
 - 3 失敗を重ねてしまいタンソクする。
 - 4 ソッコク判断を下す。
- (ウ) 次の例文中の——線をつけた「で」と同じ意味で用いられている「で」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 本を読んで感想を書く。

- 1 上着を脱いで手に持つ。
 - 2 あまりに立派で驚いた。
 - 3 自転車で坂道をくだる。
 - 4 五分で外出の準備をする。
- (エ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

向日葵の蕊ひまわりしべを見るととき海消えし

芝しば不器男ふきお

- 1 花の中心にある蕊へと視点を焦点化していくことで、光り輝く大海原のような向日葵畑から輝きが失われてしまった悲しみを感覚的に表している。
- 2 近景へと焦点を合わせていく映像的手法を用いることで、眼前の向日葵の印象を鮮明に浮き上がらせながら海の姿も意識されるように表現している。
- 3 一面に広がる向日葵畑の圧倒的な存在感に、まるでこちらへ迫ってくるような錯覚に陥って海にいらることさえ忘れてしまったという感動を描いている。
- 4 太陽に向かい咲き誇っていた向日葵の花が蕊だけを残して枯れ果てたことで、向日葵畑の背後にある海の存在感すら消えうせたことを示している。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、孫叔敖(注)といふ人、幼少のときに、外へ出でて遊びければ、両頭の蛇とて、二つ頭のある蛇を見たり。日本にいふ日ばかりのたくひなるべし。そのときに、その子の母が、「なんぢはいかなる子細ありてか、

かくものを食はずして泣くぞ。」と問ひけるほどに、叔敖答へて曰はく、「今日われ両頭のくちなはを見け

れば、明日まで命を延ぶべからず。」と言ひけるを、母もとより世に優れたる人なれば、外ほかのことを聞き

入れずして、「まづその蛇はいつちにかある。」と問ふ。叔敖が曰はく、「両頭のくちなはを見るものは必

ず死すと、日ごろより聞き及びしゆゑに、他人のまたこれを見んことを恐れて、地に埋みける。」と言ふ。

母、このことを聞きて曰はく、「憂ふることなかれ、なんぢは死ぬまひぞや。そのゆゑは、人として陰

徳あれば陽報あり、天は高けれども、低き地のことをよく聞けり、徳は不祥に勝ち、仁は百禍を除く、と

いふことあれば、なんぢは死せぬのみならず、あまさへ楚國(注)におこらん。」と言ふ。成人して後に、はた

して令尹(注)といふ官人になれり。その国の民が、叔敖は蛇をさへ埋むほどの人なれば、偽りあるべからずと

て、そのことばをよく信じけり。

また、秦の穆公、駿馬(注)を失はれしとき、五人の盗人、この馬を殺して食らふ。穆公、五人を殺さずして、

くすり酒をたまふ。その後晋と秦と戦あり。かの五人、命を惜しまず働く。穆公の曰はく、「陰徳陽報を

得とは、これこのいはれなり。」と。

〔実語教童子教諺解〕から。

(注) 孫叔敖 中国春秋時代(紀元前八〜前五世紀)の人物。

日ばかり 蛇の一種。有毒とみなされていた。

くちなは 蛇。

仁 思いやりの心。

令尹 君主の政務を補佐する官位。

駿馬 足の速い、優れた馬。

不祥 災い。
百禍 多くの災い。

秦の穆公 中国春秋時代の国である秦の君主。

晋 中国春秋時代の国名。

(ア) ―線1「かくものを食はずして泣くぞ。」とあるが、「叔敖」が泣いている理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 有毒な蛇にかまれてしまったので、明日まで生きることができないと恐怖を感じているから。
- 2 天の神とされている蛇を殺してしまったので、不吉なことが起きると不安を感じているから。
- 3 見たものは死ぬと言われている蛇を見てしまい、自分は今日中に死ぬと恐怖を感じているから。
- 4 不吉な蛇と遭遇してしまい、自分や母に災いが訪れるのではないかと不安を感じているから。

(イ) ―線2「憂ふることなかれ」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「叔敖」が日ごろから命あるものを大切にしていることは、天が知らなくとも「母」は知っているので、自分のあやまちを気に病む必要はないということ。
- 2 天は地上の出来事をよく知っており、人は日ごろの行いによって相応に報われるものだから、「叔敖」は自分の身を心配しなくてもよいということ。

3 「叔敖」は蛇を殺してしまったことを気にかけているが、誠意をもって蛇を埋葬したことを天は見ているので、悲しむ必要はないということ。

4 蛇を埋めてしまったことに不安を感じているようだが、日ごろからよい行いをしている「叔敖」を蛇も許してくれるから、こわがらなくてよいということ。

(ウ) ―線3「そのことばをよく信じけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「叔敖」は蛇に立ち向かうほど勇敢な行動をとれる人物であるから、何か災いが起きても自分たちを助けてくれるだろうと、「民」が信用しているということ。

2 「叔敖」は人々の命を守るためには手段を選ばないような人物であるから、戦が起きても自分たちを見捨てるわけがないと、「民」が信用しているということ。

3 「叔敖」は自分の命よりも蛇の命を優先するような人物であるから、自分たちを正しい道へと導いてくれるに違いないと、「民」が信じているということ。

4 「叔敖」は人々に災いが及ぶことのないよう気づかえる人物であるから、自分たちをだますような行いはするはずがないと、「民」が信じているということ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「叔敖」が他人を思いやり蛇を地に埋めたことで信望が集まったように、「穆公」には「盗人」を許し命を助けた「陰徳」によって、晋との戦でその「盗人」が活躍するという「陽報」があった。

2 「叔敖」が「母」のために蛇を殺したことで人々から非難されたように、「穆公」も「盗人」の罪を不問にした「陰徳」により、晋との戦でその「盗人」に苦しめられるという「陽報」を受けた。

3 「母」の予言どおり「叔敖」は日ごろの行いが認められて令尹となったが、「穆公」にも「盗人」に駿馬を与えた「陰徳」が原因で、その駿馬が晋との戦に勝利をもたらすという「陽報」が訪れた。

4 「母」の言ったとおり「叔敖」は命が助かっただけでなく令尹になることもできたが、「穆公」は「盗人」の罪を不問にした「陰徳」が災いして、戦が起こるといって「陽報」を招いてしまった。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

十九世紀末、フランスのパリでは浮世絵がブームになり、「重吉（シゲ）」の仕える「林忠正」は、画商として成功を収めていた。一方、「重吉」らの友人であるオランダ人画家の「フィンセント」は、新天地を求めてフランス南部のアルルに旅立った。ある日、「重吉」は、同業者から見下した態度をとられた「忠正」に従い、パリを流れるセーヌ川へ出た。

ボン・ヌフ——「新しい橋」という名前は十七世紀初頭に橋の完成とともにつけられてからずっと変わることはなかった——は、セーヌに浮かぶ島、シテの西側の先端を横切って、右岸と左岸をつないでいる。橋の中心に向かって石畳がかすかなカーヴを描き、橋の両側にはガス灯の柱が一定間隔で並んでいる。ちょうど橋脚の真上にふたつの灯柱が立ち、そのあいだには半円形の欄干と同じく半円形の石造りのベンチが一体で造られている。優雅なかたちのベンチは、ほぼ三百年もの昔から、セーヌを眺めるために立ち止まる人の到来をいつも待っていた。

橋のちょうど真ん中あたりで、忠正は、吸い寄せられるように半円形の欄干に近づいていった。重吉も、その後が続いて、船の舳先のような欄干の近くに佇んだ。

心地よい川風が頬をかすめて通り過ぎてゆく。夜九時を過ぎ、ようやく太陽が退場しようとしている。その代わりに黄昏が静かに迫っていた。

重吉は、日本から遠く離れた異国の地、パリに、こうして忠正とふたりでいて、セーヌに架かる橋の真ん中に立っている不思議を思った。

確かに、自分は、日本にいたとき、この街にこうしていることを夢みていた。——ということは、いま、自分は、あの頃の夢の中で生きているのだろうか。

ふと、フィンセントのことを思い出した。

日本へ行きたいとフィンセントは言っていた。夢の国で生きてみたいのだと。

無謀な夢は、かなわなかった。その代わりに、彼はアルルへ行った。そこに自分の理想郷を創ることを夢みて。——その夢もまた、かなわなかったけれど。

それでも、彼は描いたのだ。あんなにも激しく、せつなく、自分自身を画布にぶつけて。アルルから次々に送られてきた彼の絵の切実さ、明瞭さ、まぶしさ。アルルの陽光を吸って命を与えられた絵。そんな絵を描くことが、彼のほんとうの夢だったのではないか。

テオとともにアルルにフィンセントを見舞ったとき、彼はうわ言のようにつぶやいていた。——自分は「いちばん描きたいもの」を、まだ描いていないんだと。

とすれば、彼はまだ見果てぬ夢を見ているのだろうか。「いちばん描きたいもの」を描き上げたとき、そのときこそ、画家としての彼の夢がなくなったといえるのだろうか。

「なあ、シゲ。……お前、この街をどう思う？」

忠正の声がした。重吉は、川面に放っていた視線を石の欄干にもたれている忠正に向けた。

「そうですね、僕にとっては……現実のものとは思えない、夢のような街です。」

重吉は、心に浮かぶままをすなおに口にした。

「林さんと日本橋の茶屋で話をしたときのこと、いまでもときどき思い出します。おれはパリに行く……と林さんがはつきり言ったあとき、なんとなく、パリの街なかを流れているセーヌ川が、隅田川に重

なつて見えたような……。」

「なんだそれは。」忠正が笑った。

「セーヌ川と隅田川じゃ、まったく違うじゃないか。」

「わかつてますよ。」重吉も苦笑した。

「でも、あのとき……なぜだかわからないけれど、いまの僕たちの姿が、ほんのいつとき、見えていたような……そんな気がします。」

それからまた、しばらくのあいだ、ふたりは黙って川面をみつめていた。やがて、忠正が独り言のようにはづりと言った。

「つれないよなあ。……こっちはさんざん苦しんで、もがいて、あがいているっていうのに……いつだって、知らぬふりをして流れていやる。」

重吉は、顔を上げて忠正を見た。その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた。

「初めてこの街に来たときは、何をやってもからかわれたし、馬鹿にされたもんだ。『R』^{エール}の発音がなつてないとか、真つ平らで引つかかりのない顔だとか、背が低いから燕尾服^{タキシード}なんぞ似合わないだとか、日本は未開の地で野蛮な人間が住んでいるだとか……まあ、散々だった。」

馬鹿にされればされるほど、西洋人に引けをとるまいと、齒を食いしばって我慢し、フランス語の勉強を重ね、ルーブル^注へ行って片っ端から西洋絵画を見まくった。どんだん外に出て、人に会った。自分は日本という国を背負っているのだ、絶対に負けてはならぬ、と心に誓っていた。

それでもくやしさをぬぐい切れないときには、セーヌ川のほとりをひとり歩いて歩いた。どこまでも、いつまでも。歩き続けるうちに朝になってしまったこともあった。くやしきことは、全部、この川に捨ててきた。それらはとるに足りない芥^{あかた}になって、薄緑色の流れに消されていった。

この街をセーヌが流れている。その流れは決して止まることはない。どんなに苦しいことがあっても、もがいても、あがいても……この川に捨てれば、全部、流されていく。そうして、空っぽになった自分は、この川に浮かぶ舟になればいい。——あるとき、そう心に決めた。

たゆたいはしても、決して流されることなく、沈むこともない。……そんな舟に。

「そんな戯言^{たわごと}を、アルルに旅立つまえのフィンセントに話したんだ。」

重吉は、えっ、と思わず声を漏らした。

「フィンセントに……？」

忠正はうなずいた。

「アルルに行く前日だったかな。お前が留守のあいだに、フィンセントが店に来たんだ。アルルに行くきっかけを作ってくれたからと、わざわざ礼を言うために。」

短い時間、ふたりは会話を交わした。忠正は、アルルに行ったら自分が描きたいと思う絵を存分に描くようにと助言した。

フィンセントは黙って聞いていたが、突然、告げた。

³——いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません。

不思議に思った忠正は、それは何かと尋ねた。フィンセントは、すぐには答えようとしなかったが、やがて打ち明けた。

——セーヌです。

——セーヌ？

すぐにでも描けそうなモティーフだ。実際、^(注)印象派の画家たちの多くが画題に選んでいる。なぜ永遠に描けないなどと言うのだろうか。

馬鹿ばかりしい理由ですが、と前置きして、フィンセントは打ち明けた。テオを頼ってパリに出てきて、夏を迎えた頃、夕暮れどきにセーヌ河畔をそぞろ歩きました。あふれる光とまぶしさに目を細めていると、まぶたの裏が黄色くなるような気がした。

黄色いセーヌだ、と急に思いつき、次の日、ポン・ヌフの真ん中に^(注)イーゼルを立て、黄色と緑の絵の具を大量に準備して、「黄色いセーヌ」を描こうとした。すると、すぐに警官がやって来て、ここで絵を描いてはいけない、と忠告した。その日は仕方なく帰ったが、次の日、あらためて出かけていった。が、同じように警官が来て、同じことを言われた。

フィンセントは、何もしていないのに、セーヌに架かる橋の上でイーゼルを立てることを禁止されてしまった。この不名誉な出来事を、テオに話すことはできなかった。

フィンセントは打ちのめされた。セーヌに、パリに拒絶された、そんな気がした。

その日から、どうやったらパリ以外のところで絵を描いて生きていけるか、そればかりを考えて、二年間過ごしてきた。日本へ行くことがかなえばそれがいちばんよかったはずだが、それでも「自分だけの日本」をみつけにアルルへ行けることになって、ほっとしている。自分はこれから、セーヌだのパリだのにこだわることなく、アルルで自由に絵を描こうと決めている。——そう言って、フィンセントは話を締めくくった。

「その話を聞きながら、おれは気づいたんだ。フィンセントは、ほんとうはいつまでもパリにとどまりたいと願っている。けれど、この街にどうしたって受け入れられないとわかってしまったから、出ていく決心をした。……だとしたら、さびしすぎるじゃないか。」

そんな思いを胸に秘めたまま、アルルへ行ってはいけない——。

忠正は、フィンセントに言った。——セーヌに受け入れられないのなら、セーヌに浮かぶ舟になればいい、と。

嵐になぶられ、高波が荒れ狂っても、やがて風雨が過ぎれば、いつもの通りおだやかで、光まぶしい川面に戻る。

⁴だから、あなたは舟になって、嵐が過ぎるのを待てばいい。たゆたえども、決して沈まずに。

——そしていつか、この私をはっとさせる一枚を描き上げてください。

そのときを、この街で待っています。

⁵忠正の言葉を追いかけてながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた。

目頭が、どうしようもなく熱くなった。——なぜかはわからない。けれど、涙がこぼれてしまいそうだった。

滔々とセーヌは流れていた。苦しみも、悲しみも、やるせなさも、すべてをとるに足りない芥に変えて、とどまることなく流れていた。

(原田^{はらだ} マハ「たゆたえども沈まず」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) テオⅡ「フィンセント」の弟。

隅田川Ⅱ現在の東京都を流れる川。

日本橋Ⅱ現在の東京都の地名。

燕尾服Ⅱ男性の洋装の礼服。

ルーブルⅡルーブル美術館のこと。パリにある国立の美術館。
モティーフⅡ作品の主題。ここでは、描写する対象のこと。

印象派Ⅱ十九世紀にフランスで起こった芸術家の一派。
イーゼルⅡ画布などを支えて固定する道具。

(ア) — 線1「ふと、フィンセントのことを思い出した。」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 夢みていたパリにすることが今一つ実感できない一方で、「フィンセント」は「いちばん描きたいもの」を描き上げれば、夢がなかったといえるのだろうかと思いを巡らせている。

2 理想の地だったパリに立ってはいるものの、「フィンセント」のような「ほんとうの夢」が自分にはまだないというふうに思い至り、早くみつけないければならないと思っている。

3 希望通りパリに来られた自分は非常に恵まれていると思う一方で、日本にもアルルにも行くことがかなわず、パリで失意の底に沈んでいる「フィンセント」に思いをはせている。

4 あこがれのパリに立って日本をなつかしく思い出し、「フィンセント」の日本への思いに共感する一方で、それはやはり「無謀な夢」であり故郷がいちばんだと思っている。

(イ) — 線2「その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた。」とあるが、そのときの「微笑」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 異国に受け入れられずひとりもがいてきたことは遠い記憶であり、パリを離れる自分にはもはや無関係だと開き直った微笑。

2 異国で経験してきた苦しみやあせりはすべてセーヌに捨ててきたので、もうパリで悩むことはないだろうという安心に満ちた微笑。

3 異国に受け入れられようともがき続けた結果、日本人でありながらパリで成功したことによって得た自信をみなぎらせた微笑。

4 異国での苦しみやくやしさにやりきれない思いをすることもあるが、これからもパリで生きていくという覚悟もにじんだ微笑。

(ウ) — 線3「いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません。」とあるが、ここでの「フィンセント」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 正当な理由もなくセーヌを描くことを禁じたパリの警官に怒りを抱いており、同じよそ者である「忠正」に共感してほしいと思っているので、強い調子で読む。

2 外国からパリに来た多くの印象派の画家たちが、苦労もなくセーヌを描き次々と世に認められていることに劣等感があるので、自分の力不足を恥じるように読む。

3 パリを離れることは決めているものの、未練もあるというほんとうの気持ちを「忠正」には聞いてもらいたいという思いもあるので、不意に打ち明けるように読む。

4 パリに来たばかりの頃は自分と同じように苦労をしていた「忠正」もいまでは成功者であり、自分の気持ちを理解できないと思っているので、皮肉をこめて読む。

(エ) —線4「だから、あなたは舟になって、嵐が過ぎるのを待てばいい。」とあるが、そのときの「忠正」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「フィンセント」にほんとうの気持ちを打ち明けられ、かつての自分と同じく、嵐の中であっても力強く浮かび続ける「舟」のように、諦めずパリに残っていてほしいと訴えかけている。

2 「フィンセント」のほんとうの気持ちを察して、自分の体験と重ね、嵐に揺られはしても決して沈まない「舟」のように、アルルに行っても希望を捨てずについてほしいと願っている。

3 「フィンセント」のほんとうの気持ちを見抜き、かつての自分と重ね合わせながら、嵐の中を勇敢に突き進む「舟」のように、前向きな気持ちでパリを旅立ってほしいと元気づけている。

4 「フィンセント」にほんとうの気持ちを告げられ、自分はいじけてしまったが、嵐が過ぎ去るのをじっと待つ「舟」のように、何があっても諦めずセーヌを描いてほしいと励ましている。

(オ) —線5「忠正の言葉を追いかけながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた。」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「忠正」から、「フィンセント」が警官に受けたひどい仕打ちを聞かされ、よそ者に冷淡なパリで自分もくやしい思いをしたことがよみがえり、涙が出そうになっている。

2 「忠正」から、「フィンセント」の本心を聞かされ、新たな夢を求めてアルルに行ったものと単純に考えていたことが思い出され、自分の未熟さに嫌気がさしている。

3 「忠正」から、「フィンセント」に伝えられた言葉を聞き、自分の知らないところでふたりが夢のために様々な思いを抱えていたことを知り、大きく心を動かされている。

4 「忠正」から、「フィンセント」がほんとうに描きたかったものはセーヌであり、それを諦めざるを得なかった事情を聞き、何もできない自分の無力さに失望している。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 画商としての自覚に欠ける「重吉」に対して画家の思いや苦悩を伝えようと「忠正」が懸命に話す場面を、「船の舳先のような欄干」を舞台にして、ふたりの新しい船出を象徴的に描いている。

2 「忠正」や「フィンセント」の心労を知った「重吉」が、あこがれていたパリへ徐々に失望していく過程を、よそ者に冷淡なパリを象徴する「ボン・ヌフ」を背後に感傷的に描いている。

3 日本人が異国の地で生きていくことの苦労を「重吉」に伝えようとする「忠正」の姿を、ふたりの思い出の地である「隅田川」と「セーヌ」とを重ね合わせることで、感動的に描いている。

4 「忠正」と「フィンセント」の苦悩を知り、「重吉」にとってパリの地で生きることに関心味が帯びてくる様子を、すべて受け入れるように流れる「セーヌ」の姿とともに印象的に描いている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

近年、機械でもできる単純作業はAIに任せ、人間はクリエイティブな仕事に集中すればいい、という観点で職場へのAI導入が語られている。しかし、アメリカの社会学者リチャード・セネットが『それでも新資本主義についていくか』で論じるように、¹単純な事務作業などのルーティンワークはむしろ個人を守ってくれるものと言える。「クリエイティブな仕事」と言うとき聞こえはいいが、実際のところ、クリエイティブな作業には、どこまでやってもゴールに到達することはないというハードさがつきまとう。ルーティンワークに携わる方が明らかに負担は軽しいし、誰もが「芸術家」として生きる厳しさに耐えられるわけでもない。

それでも、もしかしたら「あたらしい技術」の進化によって、たとえば人間の能力そのものが飛躍的に高められ、皆が「人的資本」としての自らの価値を向上させて活躍できる時代が到来するかもしれない。高められ、皆が「人的資本」としての自らの価値を向上させて活躍できる時代が到来するかもしれない。

A、今の技術のあり方を見る限り、「あたらしい技術」を使いこなし、自分が「主人公」となって活躍しているという感覚は、単なる錯覚ということになりそうだ。このまま「あたらしい技術」が進化していくならば、「主人公」は人間ではなくテクノロジの側となるだろう。やがて私たちは「機械がまだ機械のたのしさを持っていた時代 科学が必ずしも人を不幸にすることは決まっていなかったころ」そこはまだ世界の主人公は人間だった」という『天空の城ラピュタ』のキャッチコピーそのままの世界を目の当たりにするかもしれない。

「あたらしい技術」は、既に、私たちと融合を始めている。スマホでもネットでも、「あたらしい技術」は私たちが使う「道具」というより、今やその中にどっぷりと浸かる「第二の自然」だ。道具であれば、使うか否かを決める主体は私たちだが、そうした旧来のビジョンでは、既に「ここにあるもの」として、私たちが一体化しつつある「あたらしい技術」に対応できない。むしろ、道具だと思っていた「技術」が主体で、私たちが客体になるのが、「あたらしい技術」なのだ。

▼車の自動運転を例に、この主体と客体の関係を考えてみよう。AI研究者の中には、³現在の自動運転技術のことを「物足りない」と言う人もいる。その理由は、今、自動運転と呼ばれているものが本当の「自動」ではないからだ。自動になったのは運転という作業に限定され、どこに行くかという目的地は運転する人間が入力しないといけない。つまり、今の自動運転はまだ「道具」であり、運転する人間が主体となつて、自動運転という便利な道具を使っていると見える。

「本当の」自動運転であれば、車に乗り込んだだけで、車は目的地に向かって走り出す。車に乗った者の行動履歴やカレンダー機能等のデータがすべてAIによって解析されているので、いちいち入力しなくても、「今日は○月○日○曜日の○時だから、この人の行先は△△だ。」ということをも、車がちゃんと把握しているわけだ。車に乗った者が自分でアクションを起こさなければならぬのは、何かイレギュラーな予定が入ったときだけであり、「いつもの目的地に向かおうとしているな。変更を指示してやらなくちゃ。」といった具合に修正してやればよい。こうした「本当の」自動運転においては、アクションを起こす主体は自動車であり、人間はただリアクションするだけの客体になる。B、主体と客体の関係が転倒するのだ。

現在の自動運転が「本当の」自動運転になるのは、技術的なことだけで言えば、ほんのワンステップである。「何もしないで、車が勝手に目的地に連れて行ってくれるなんて、すごく便利じゃないか。」と思うだろうか。

だが、人間が起点という意味での主体でなくなるといことは、単に「便利になった」というだけでは

終わらない。この問題は、思想的レベルというより、もっと身近で具体的なところに及んでくる。近代以降の社会の枠組みは、まさに、人間は主体的な意志を持つ存在であるという前提を基につくられてきた。「あたらしい技術」がもたらす主体と客体の転倒は、⁴そうした枠組みそのものに根本的な変革を迫ることにもなりかねない。

たとえば、犯罪者に刑罰を与えることを正当化するロジックのひとつに、^(注) 応報説と呼ばれるものがある。応報とは「因果応報」の応報だが、要するに、個々人には自由意志があるということを前提に、犯罪行為をしないという選択もできたはずなのに犯罪行為をしてしまったというのは、その人がそういう意志を持ったからであり、だから責任の所在はその人にある、という論理だ。▲

では、「自動」運転で事故が起こった場合、責任は誰が負うことになるのだろうか。今までであれば、事故の責任をとって処罰されるのは車を運転していた人間、というのが社会のルールだった。なぜなら、主体である運転者には、事故を起こさない選択ができたにもかかわらず、事故を起こしてしまったからである。しかし、本当の「自動」運転の主体は、もはや車に乗っている人間ではないので、現在の法律では対応できないということになってしまう。

私たちの主体的な意志を前提としない技術が世の中を覆っていったとき、こうした問題は法律にとどまらず、^(注) マーケティングから政治の分野に至るまで、社会のあらゆるところで齟齬や混乱を生じさせていくだろう。どんなに「便利になる」と言われても、私たちが「あたらしい技術」に不安を抱くのは、それによつて、これまでの社会の枠組みや人間という存在そのものが大きく揺らぐことを、どこかで感じているからかもしれない。

「あたらしい技術」によつて、今までにない社会が到来すること自体は明らかであり、私たちは、その入口に立っているのだと言える。もはやこれまでの価値観ではやっていけないし、先の見えない時代を生き抜くための対応策が求められている。しかし、⁵「それなら、なおさら『人的資本』としての自分の価値を高めなければ。」などと考えない方がいい。個人の能力を高める意義を否定はしないが、「あたらしい技術」がもたらす「あたらしい社会」においては、どんなに一所懸命に自らの「人的資本」の価値を高めようとしても、疲弊するばかりということになるだろう。そんなふうに関心に向けるのではなく、むしろ自分たちを取り巻く身近な人々やそこに生きる社会との、あるいは物理的な環境や技術との関係をどのように築いていくかに、もっと目を向けることが必要なのだ。

その時、ことさらに「あたらしい技術」の脅威に警鐘を鳴らすだけでは、「何だか怖い」という不安を掻き立てるだけに終わってしまうし、かといって「あたらしい技術」がバラ色の未来をもたらすという楽観論も、技術が悪用される可能性をあまりにも軽視しているという点で、どこか胡散臭い。

確かなことは、⁶ 私たちがとるべき態度は、定かではない未来の予測に過剰に反応して右往左往することではない、ということである。どんなに「変わって欲しくない」と願っても、これからの社会は変化せざるを得ないだろう。だとしたら、どのように変わって欲しいのか、そのビジョンを思い描くことこそが実践的な解につながっていくはずだ。

そのためには、今「あたらしい技術」が社会をどう変えようとしているのかを知らなければならぬ。
(堀内 進之介「人工知能時代を〈善く生きる〉技術」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) AIⅡ人工知能。

テクノロジーⅡ科学技術。

クリエイティブⅡ創造力に富んださま。

天空の城ラピュタⅡ一九八六年公開のアニメーション映画。

ビジョンⅡ見通し。展望。 イレギュラーⅡ通常とは異なるさま。

ロジックⅡ論理。 マーケティングⅡ商品の販売を促進するための活動。

齟齬Ⅱ食い違い。

(ア) 本文中の **A**・**B** に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|----------|-------|----------|--------|
| 1 A おそらく | B しかし | 2 A たしかに | B たとえば |
| 3 A だが | B つまり | 4 A もちろん | B むしろ |

(イ) —線1「単純な事務作業などのルーティンワークはむしろ個人を守ってくれるものと言える。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ルーティンワークはAIの導入により精度が上がり、効率も向上するため、負担が軽くなるから。
- 2 ルーティンワークは仕事の範囲が明確なため、際限なく取り組む必要はなく、負担が軽いから。
- 3 ルーティンワークは責任がある仕事のため、やりがいを感じられ、個人の価値が高められるから。
- 4 ルーティンワークは同じ作業を繰り返すため、自然と技術が高まり、個人の価値も向上するから。

(ウ) —線2『「あたらしい技術」は私たちが使う『道具』というより、今やその中にどっぷりと浸かる『第二の自然』だ。』とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「あたらしい技術」は自然に取って代わろうとしており、自然を改変する「道具」というより、人間が生きていくためになくてはならないものとして存在しているということ。
- 2 「あたらしい技術」は使い方次第では人間を不幸にするおそれがあり、人間の生活を豊かにするための「道具」というより、危害を加えかねない存在となっているということ。

3 「あたらしい技術」は人間が意志を持って使用する「道具」というより、使用しているという実感がなくなるほど当たり前のものであり、身近に存在しているということ。

4 「あたらしい技術」は人間にとって便利な「道具」というより、人間を「道具」のように扱い、知らず知らずのうちに人間を支配するような存在となっているということ。

(エ) —線3「現在の自動運転技術のことを『物足りない』と言う人もいる。」とあるが、そのことについて筆者はどう述べているか。その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 運転という作業のみが自動化されているに過ぎないという考え方に対して、すべてが自動化されると人間の立場が主体から客体へと変化してしまうため、手放して喜ぶことはできないと考えている。
- 2 現在の技術では不測の事態が起きた際には人間の判断に頼らざるを得ないという考え方に対して、今後はその判断の機会さえ奪いかねないため、人間の主体性を否定する危険な技術だと恐れている。
- 3 人間の指示がなくても目的地まで自動で移動する技術にはほど遠いという考え方に対して、現在の技術とはわずかな差であり、自動車が主体的に目的地を判断する時代は間近だと心待ちにしている。
- 4 「道具」を使用する主体の地位から人間を転落させるには至らないという考え方に対して、不測の事態に対応できるのは人間だけであり、主体と客体の転倒などあつてはならないと警戒している。

(オ) —線4「そうした枠組みそのものに根本的な変革を迫ることにもなりかねない。」とあるが、筆者がそのように述べる理由を説明した次の文中の I・II に入れる語句として最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、I については六字で、II については五字でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

現代の社会は、人間の I を前提につくられているため、「あたらしい技術」によって起きた事故に対する II が特定できなくなるなど、社会のあらゆる場面で対応の困難な事態が生じるおそれがあるから。

(カ) —線5『それなら、なおさら「人的資本」としての自分の価値を高めなければ。』などと考えない方がいい。』とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「あたらしい技術」のもとでは、人間が主体であり続けることは困難であるため、従来のやり方では個人の職業的な能力を向上させようとしても消耗するだけだから。
2 「あたらしい技術」に合わせて社会の環境が整備されなければ、いくら個人の職業的な能力を高めても、それを発揮するための場がないので無駄になってしまうから。

3 「あたらしい社会」では個人の職業的な価値を高めようとするとかえってその限界が露呈されるため、無力感ばかりが意識され、他者へ依存するようになるから。

4 「あたらしい社会」では人間の能力そのものが飛躍的に高まるため、個人の職業的な価値を高めようとする努力は報われず、意味を見いだせなくなってしまうから。

(キ) —線6「私たちがとるべき態度は、定かではない未来の予測に過剰に反応して右往左往することではない」とあるが、筆者は「私たちがとるべき態度」についてどのように述べているか。その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「あたらしい技術」によって社会がますます便利になっていくという現実を全面的に受け入れ、よりよい社会を目指して、一人ひとりが科学技術の発展に貢献する必要がある。

2 社会が変化することは確実だと認識した上で、「あたらしい技術」が社会へもたらす影響について知り、今後のよりよい社会のあり方について考えていくことが重要である。

3 これからの社会では、主体と客体の転倒をもたらし「あたらしい技術」の重要性が増していくことは間違いないので、個人の能力を高めることに専念することが大切である。

4 「あたらしい技術」によってもたらされる社会の変化を食い止めるためには、小さな変化も見逃さないよう、様々な脅威に目を光らせながら柔軟に対応することが大事である。

(ク) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 AIの職場への導入が人間の働き方どのような影響を及ぼすのか述べた上で、その働き方の変化が人間の能力を飛躍的に向上させていく可能性について、「人的資本」という観点から論じている。

2 科学技術が人間にとって便利な「道具」から、「主体と客体の関係」を転倒させてしまうほどの存在へと進化していくことへの期待感を、映画のキャッチコピーを引き合いにしながら論じている。

3 科学技術の進化によってもたらされる「あたらしい社会」の具体的な姿を、車の自動運転技術を例に説明し、希望や幸福に満ちた未来を実現するための生き方を模索していくべきだと論じている。

4 人間と一体化しつつある「あたらしい技術」によって社会がどう変わろうとしているのか説明した上で、個人の能力よりも周囲や社会などのかかわり方に、もっと関心を向けるべきだと論じている。

受 検 番 号							氏 名
0	0	0		0	0	0	
1	1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	2	
3	3	3		3	3	3	
4	4	4		4	4	4	
5	5	5		5	5	5	
6	6	6		6	6	6	
7	7	7		7	7	7	
8	8	8		8	8	8	
9	9	9		9	9	9	

受検番号は左から書くこと。

注意事項

- HBまたはBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して、○の中を塗りつぶすこと。
- 答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
- 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れること。
- 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしないこと。

良い例	悪い例		
	線	小さい	はみ出し
	丸囲み	レ点	うすい

問一									
(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)			
		d	c	b	a	4	3	2	1
1	1	1	1	1	1				
2	2	2	2	2	2				
3	3	3	3	3	3				
4	4	4	4	4	4				

*解答欄は裏面にあります。
*解答欄は裏面にあります。
*解答欄は裏面にあります。
*解答欄は裏面にあります。

各二点

問二			
(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4

各四点

問三						
(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)	
1	1	1	1	1	1	
2	2	2	2	2	2	
3	3	3	3	3	3	
4	4	4	4	4	4	

各四点

問四							
(ク)	(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1		1	1	1	1
2	2	2		2	2	2	2
3	3	3		3	3	3	3
4	4	4		4	4	4	4

アは二点、オは両方できて四点、他は各四点

問五	
(イ)	(ア)
	1
	2
	3
	4

アは四点、イは六点

*解答欄は裏面にあります。

II 国語

正答表並びに採点上の注意

(平成三十一年度)

問一									
(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)			
		d	c	b	a	4	3	2	1
2	1	4	3	1	2	くわだ(てる)	ちようそ	かんしょう	しんぽく
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点

問二			
(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	4	2	3
4点	4点	4点	4点

問三					
(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
4	3	2	3	4	1
4点	4点	4点	4点	4点	4点

問四								
(ク)	(キ)	(カ)	(オ)		(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
			II	I				
4	2	1	責任の所在	主体的な意志	1	3	2	3
4点	4点	4点	4点	両方 できて	4点	4点	4点	2点

問五							
(イ)	(ア)						
<p>リサイクル率を向上させるためには、</p> <table border="1" style="text-align: center;"> <tr> <td>紙製容器包</td> <td>装やプラスチック</td> <td>チツク容器</td> <td>包装を分別</td> <td>して資源に</td> <td>する</td> </tr> </table> <p>ことが重要だと考えられます。</p>	紙製容器包	装やプラスチック	チツク容器	包装を分別	して資源に	する	4
紙製容器包	装やプラスチック	チツク容器	包装を分別	して資源に	する		
6点	4点						

(イ)は正答例。

採点上の注意

【問題全般について】

- 中間点は、問五(イ)以外には設けないこと。
- 疑問点は複数の採点者及び点検者によって判断し、校内で統一すること。

【抜き出し問題について】

- 完全正答とする。誤字・脱字については減点対象とはせず、誤答とする。

【中間点のある記述問題について】

- 正答例以外であっても、与えられた条件をすべて満たし、問題の趣旨に即した文ならば、正答として六点を与える。
- 内容については、中間点を設けないこと。
- 誤字・脱字(句読点に係る誤りを含む)については、その数にかかわらず二点減点とする。誤字・脱字(句読点に係る誤りを含む)の判断については、校内で統一すること。
- 表現に問題があり、それによって明らかに問題の趣旨から外れている、内容を読みとることができない等の場合は、誤答とする。ただし、許容できると判断した場合は、その数にかかわらず二点減点とする。表現の問題については、複数の採点者及び点検者によって判断し、校内で統一すること。
- 中間点は、誤字・脱字(句読点に係る誤りを含む)がある場合と表現に問題がある場合の減点以外は設けないこと。したがって、中間点は四点または二点となる。
- 指定語句がある場合、その語句が含まれていない解答は誤答とする。また、指定語句がそのまま書かれていない場合(漢字表記をひらがな表記にしたもの等)や指定語句の誤り(誤字・脱字)についても誤答とする。

○ 問五(イ)について

指定語句は「分別」と「資源」である。

得点項目A 内容については、次の二点に触れていること。

- (あ)「紙製容器包装(雑がみ)などを分別すること。
- (い)「紙製容器包装(雑がみ)などを資源にすること。

〈正答例〉

リサイクル率を向上させるためには、
古紙や雑がみなどを燃やすごみに出さず、**分別して資源に**する
ことが重要だと考えられます。 20
リサイクル率を向上させるためには、
資源化されている割合の低い紙製容器包装**の分別を進める**
ことが重要だと考えられます。 20